

浄土

1982-3

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 第一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別料外郵便物) 第三二五号
昭和五十七年二月二十五日印刷 昭和五十七年三月一日発行
第三十八卷 三月号





おひがんを迎えて

梅の香りに誘われて、思わず佇ずんでしまった。紅梅、白梅の寄り添うように咲きほこるさまに、心もなごむ。きさらぎ二月の寒気も、もうすぐそこに控える、やよいの春の暖かさを秘めていた。どんなに厳しい冬の寒さでも、生命の新しい躍動が息吹いている。待ちこがれる春を先取りした一輪一輪の梅のほころびが、そのことを物語って、私たちに春の訪れを教えてくれた。

——そんな二月の短かいひと月も、暦をめくって、もう三月の声。「三寒四温」と繰り返してきた一日一日の暖かい変化が、いつか小さな草木の芽吹きとともに、犬や猫の小動物たちの動きにも表われる。もう春の気配は、手の届くところ、いやこの私の手で掴むことさえできる。——そんな一日、そんな一刻。こうして穏やかに過す時の流れに、わが身と心を預け、今、私は、やよいの春に休息している。ありがたきかな……。まことに尊きこの時に、次の飛翔をはるかに想う、改めて想う。

——そんな私には、お彼岸の一週間が改めてありがた。春の季節を心から謳歌するためにも、この一週間を、まずは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜の実践をもって過したい。

(勝崎裕彦)

三月号



偏に浄土をもって宗として、
聖道をもって宗とせず。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 p.202)

目次

法 話

人生を活かして彼岸へ……………川 村 悠 穂……(2)

法然上人伝の知られないことども……………三 田 全 信……(6)

わたしとインド……………杉 田 暉 道……(10)

<随想> ほとけとの出会い(十六)……………佐 竹 隆 三……(14)

翔 ぶ(一)……………木 下 隆 一……(18)

特 別 寄 稿

M氏のこと……………村 下 武 司……(30)

俳句作法(一)……………河 野 喜 雄 ……(23)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

<訃報>
長谷川徳太郎翁と早川廣志さんの逝去を悼む ……………(36)

<表紙裏・巻頭言> おひがんを迎えて ……………勝 崎 裕 彦

念仏ひじり三国志⑨ ——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

法

話

人生を活かして彼岸へ

川^{かわ}村^{むら}悠^{ゆう}穂^ほ

(静岡市西福寺住職)

讃 題

ただこの世、後の世の為に、仏に仕えんには心をいたし、実をはげむ事、この世も思うこと叶い、後の世も浄土に生るる事にて候也。(一百四十五箇条問答)

今年は戌年、元旦の年賀状の中にこんなのがありました。中国のお話です。

「ある都への道筋に居酒屋が一軒、店の構えはこざっぱりとしていて、食器も主の気質の現れか何時も清々しく洗い並べられてあり、出される肴は、季に適し、味も

上々といった具合なのに、何故か閑古鳥、吟醸の美酒が、時を失って酔酒となる仕末です。

たまりかねた主が、街中尋ね歩くと、誰彼となく同じ答えます。

曰く。せつかくうまい酒をと杯を挙げたとたんに、ムク犬メがほえたて、かみついてくるのではね。曰く。そうだ、肴をもらうとたんかみつかれたのだよ。曰く。狗のせいだ。あの犬はよくほえる。それを思うと足も向かないよ。

そこで主は、やれやれ、店を守ってもらうつもりで飼っているのに、どうやら逆目らしい。よくほえる犬にも

困ったものだて……。

いやまてよ……犬ばかりでなく、人間だって同じかな？ と考えこんでしまったとか」

今月は早や春のお彼岸を迎えます。

彼岸とは、彼の岸であって理想の世界を指します。煩い悩み迷いの世界、即ち此の岸から悟りの世界である彼岸、即ち理想の世界を願うのがお彼岸のお寺まいりお墓まいりになるのです。

私達は此岸から彼岸に向って生活をし、活動をしているのであります。その生活とは、人生を活かすということであり、活動とは、動きを活かすということであります。ただ生きているのは、又、ただ動き廻っているのは、犬も猫もそうであります。昔は、いけ花教授のことを活花教授と書かれてあったのをよく見かけましたが、今は平仮名で「いけ花教授」とか「生け花」或は「華道教授」と書いてあるのをよくみかけます。花を活かすというのが活花ということであつたのです。

先の犬の話ですが、折角、店を守ってもらふつもりで飼つてあつたのが、逆にお客が来なくなつてしまつたということは、犬とお店を活かせずに殺してしまつ

たということになるのではないでしょうか。

どうしたら私達は、彼岸の世界、理想の世界に人生を活かし到達できるのであるでしょうか？……お釈迦さまは六波羅蜜、これを六度ともいいますが、六つのすぐれた修行をすることが彼岸に到達出来る道であると教えられました。布施・持戒・忍辱・精進・定・慧の六つの修行がそれであります。この一つだけでも大変なことですが、これを行ひ活かしてこそ彼岸の理想の世界に行かれることだと教えられました。

もう十年も前になると思いますが、静岡駅の西側の線路下に坂になったガードがありました。雨が降ると水が溜つて人も車も通れなくなりました。何気なく捨てた煙草の吸殻や紙屑が排水溝につまつて、水がはけずに溜つてしまふのでした。その後、何処のどなたか分りませんが、一人の老人が毎日のように捨てられている煙草の吸殻や紙屑を拾うようになりました。それから雨が降つても水は溜らず、人も車も何の心配もなく、ガードをくぐつて往来出来るようになりました。タクシーの運転手さんは蔭ながら、みんな喜んでおりました。

昨年、静岡駅はバルシェ（広場）と呼ばれる七階建ての

駅となり、線路は市内を東西にまたがる高架線となり、南北の交通は、その下を楽に往来出来るようになったことでしたが、名も知らぬ一人の老人の捨身施という布施行は、大きな活きた力となったことと思います。

昨年、震災後、継ぎ足し継ぎ足して出来た私の寺も、書院、庫裡を新築しようという話となり、工事は急ピッチで進み、暮には出来上り、去る一月二十四日、元祖さまの御忌開白法要をかねて、落成報告を本尊前で行いました。この工事一つを考えてみても、六度の行があったらばこそ完成されたと思うのであります。

長い間、懸案になっていた書院、庫裡の新築でありましたが、あせらずに忍びに忍び、特に景気の悪い時であり、東海地震のことが叫ばれている時であります。若い人の力が熟し、時機に適した智慧と縁が結ばれ、急速に事が進みました。

書院、庫裡の新築趣意書が発送され、それが着いたか着かない内に、第一番に協力金を届けて下さった方は、奥様が十数年も床についていらっしゃる方であり、お願い申すのも申し悪いと思っていた方であり、続いて戦争未亡人や、ガンで御主人が亡くなったばかりのお方、家

が火災の為、全焼された方が二軒ありましたが、この方々も、いち早く全額を届けて下さったことは、何と申してよいか、ただ有難く思ったことでした。

しかしながら、毎月のように海外旅行をされたり、立派にお店をやっていらっしゃる方の中で、遅く、やっと届けて下さったり、長期間の分割を希望される方があるということは、どういことが分りません。

戦後の一時は「衣食足って礼節を知る」ということがいわれましたが、今はあり余る物資がある世の中で、非行・暴力・麻薬等の事件が多くなっていることも、どういことであらましよう。

「なぜけんかするのかっていわれれば、縄張り争いでしょう。あとは、自分がいかに強いとか、周りの人に知られたい、目立ちたい。ツッパリっていうのは、学校の名を売ったり、守ったり、いいことだと思えますよ。ツッパリっていうのは学校のシンボルだと思います」

——総番長T中三年 S

「ほんとにツッパってる仲間っていうのはサ、みんなホンネ出し合ってると思うわけ。先コウ(先生)とかサ、親なんかは、くだらない、とかいうわけ。そのへんで

ね、仲間と集まるようになった「わけよ」——番長K
高一年 M〔毎日新聞〕より引用)

もう一度私達も、御先祖の前で、阿弥陀さまの前で、
私達の身の廻りを反省してみましよう。

建築することを普請(ふしん)をするといいますが、こ
れも仏教語であり「あまねくこう」と書くのは「人をた
のみて手伝を受くるなり、他力によりて造作するを普請
といふべし」といわれております。もとは、お釈迦さま
の誕生日「花まつり」の花を摘むことや、茶摘み、十二
月の煤はらい、大掃除等のことを普請といったそうです。

檀信徒の方々の財施により、又智慧あるものは智慧を
出し、労力奉仕の出来る者は労力を出して頂き、大工仕
事にも、庭の造園にも、勤労奉仕を申出て下さった方が
ありますが、その一人は「寺の為だとか、人の為だとか
思っただけでいい、自分の為にやるのだ、阿弥陀さま
の為にやるのです」といって、御自分の近くの檀信徒も
さそって手伝って下さいました。

こういう布施の集まりが、寺の力以上の柄にもない
書院・庫裡が出来上ったことでした。しかし、これから

が本当の、明るく正しく仲よい彼岸への出発点としなけ
ればならないと思います。

科学は進み、人類の進歩は凄まじいものがあります
が、一方、世界の破滅を憂う声はしきりです。核戦
争、天候異変による食糧危機、人口問題、この地球を脱
して、スペースシャトルによる宇宙都市の建設、理想の
世界を望む声もしきりですが、さががたき貪・瞋・痴の
三毒の煩惱をさけ、彼岸に到達することはなかなか難し
いことであり、南無阿弥陀仏と称名の内に六波羅蜜を精
進してゆくより他に方法はないと思うのであり、それが
人生を活かすことであろうと思います。

そして、この身はいつか滅してゆくことであります
が、次は阿弥陀さまの国に往き生まれさせて頂き、仏の
国で本当の仏となり、又、この世に残っているものを導
き護ってゆくように、この身を活かしたいと思えます。
今、又、こうしていられ、こういうことを考えているこ
とも、仏により活かされ、仏の導きによることだと思
うと、更に南無阿弥陀仏とお念仏申されずにはおれな
いことを感ずるのであります。

南無阿弥陀仏

法然上人伝の知られないことども



三田全信
さん だ ぜん しん

岡山県の誕生寺

へ行くといろいろ珍らしいものがあるが中でも何代目（四代目とかいう）椋がある。椋の実
は黒くて美しく昔小児が喜んで羽子板の羽子やハジキや
繫いで数珠などにして玩んだ。近代はその樹木から野球
のバットに作られる。今年法然上人がお生れになって
から八百五十年とするから親木が枯れて新芽を出し八百
五十年なお生命を継いでいることになる。また現本堂の
裏に爽やかな小川が流れている。川に増水があると片目
の魚が捕れる。筆者がお参りした時には身長三〇センチ
ほどの片目の生きた蛙が捕れて見せて貰った。又宝蔵に
は魚のアルコール漬が保管してあった。その因縁をきく
と、伝説では九歳の時源内武者定明という仇敵のため夜

討ちに遭って邸内が荒らされたので、上人は物かげから
小弓をもって矢を敵の眉間（或は目）を射られたところ美
事的中して血が流がれ、敵は慌てて小川の水で洗った。
それから以後その川を矢目川、小弓を射た児を小矢児、
呼ぶようになったという。

これらの名称

は事実であったかどうか判明しない
が片目の魚など鮮やかに現存している。だが筆者一人で
も伝説と事実とは必ずしも一致するとは限らないとした
い。ならば片目の魚の伝説をどう解釈するか。

放射能

の作用ということを考えざるを得ない。山

陰の三朝温泉と津山の間に奥津温泉がある、その連間に人形峠があり、目下日本一のウラニウム鉱が生産されている。鉱によつては遺伝子を変化させる分子があると、いうのみならず実験場さへあるという。長い年月の間、この広い地域の中に拡散して生物に影響を与えていることは否定出来ないであろう。この地方から今日まで優れた人材が出てゐることは明らかで今は略するが誌上に掲げられてゐる。しかしそれがウラニウムの作用だとのみ云い切れることは出来ない。しかし何等かの影響なしとは断定することも出来ない。近年史学で補助学として知られるようになって来たのは紋章学である。現代盛んになつて来た考古学のように紋章学は百年前頃から重視されて来た。その日本での権威沼田頼輔博士はその著『日本紋章学』に、九州の東郡立石氏から分立して漆間といひ大友氏の流で杏葉の紋を用ひ、漆間元邦が延喜年中に朝廷へ仕へて従五位上宮内少輔になつて、のち美作に地を賜つて久米の押領使神戸大夫というようになり海氏、菅氏と共に作州の三館公とて名ある家柄と呼ばれた（作陽誌）。

立石家は現存して現主立石欽一氏は岡山市に居住され、中

鉄バス会社の重役でおられた旧宅は、津山市二宮に保存されている。たしか重文と思う。詳しく記すると迷惑になるから略す。

漆間家の時国（法然上人の父）の時代には三館公の一として誇りをもつておられたのは何であつたらうか。のち暴徒事件が起るが、稲作の水利問題や、朝廷の役人との権力争いなどいろいろ推察されている。筆者はそれらも領けるが手織産業の利害も大いに力あつたものと考えられる。

手織を 力産したのは恐らく法然上人の母の秦氏（以下伝記による）等であろう。秦氏が日本へ渡つたのはその祖が朝鮮を経て道後に上陵し四国の牛頭山の沙越（*）から京都へ定着したという。蚕糸はこのようにして岡山地方へも伝わり織られて、地方へ伝播したと考えられる。稲作の他に織産の利を三館公は手にして榮えたと考えられる。上人の父時国公はその頃瀬戸内海 of 海賊の暴行を予知されていたと推考出来る。漆間家を襲つたのがこの海賊とは断定出来ないが、勢至丸が登山される時、父の別れの辞の中の敵とあるが、何者であるかわからない

(醍醐本伝記)。勢至丸が十五歳登山されるまで母の弟智鏡房観覺に一般の学を授けられすこぶる優秀と認められた。そこで登山就学を頻りに勧められるのである。漆間夫妻はこの子の登山を喜ばれなかったことは推察することが出来る。それは夫妻の間に子がなく、ついに岩間観音に祈願し授ったので、どれほど大切に育てられたか知れない。ことに昔から授かり児は、わが子でも自分のものでもない。勝手にすることは出来ないという言い伝えがあったので、観覺の熱心な勧めに知らずしらずに従って登山就学を認められたのであろう。

諸伝の詞 には、襲撃をうけられた事を中心にしていろいろ記されて、文芸射業など優れたことが華やかに修飾されて読者の興味をそそるように綴られている。ことに親子離別は一層胸を裂くような思いを籠めて描かれてある。しかしこれは虚構ではないことであらう上人の九歳の時と断定出来ない。登山に際して父の遺言とも思われる言葉を示されているが、それが事実になって法然上人を一層悲しめ苦しめたのである。敵夜討の事実は上人十五歳登山後三年で十八歳の時であらう。上人の学問が熟し

かけた頃で、郷里へは帰ることも出来ない『山家学生式』という法定があつて下山は許されず毎日悲歎に暮れておられたに相違ない。悲しみあまつて遁世しようと思つて、身をよせられていた師の叡空上人に身の振方をお伺いされたのであつた。その時師範の詞には「お前は世の常の悲しみに心を崩して何とするのか、僧にあるまじき事ぞ」と強く叱られて、上人は氣を取直して勉学されたと伝記にある。

新史実 『熊野年代記』の記事に一一五一(仁平元)

年美作国南荘が熊野坐神社へ奉納されたとある。『地名辞書』によると、

稲岡 今北村 南村のことなる。

誕生寺 今稲岡南村大字井庄、里方に属す。里方は

南に属す。弓削川の上流なり。(漆時国の宅趾は凡

東北二町許に在り、御所屋敷或は本丸と云う。)

これを考えると、居住の館は稲岡北庄で昔本丸と呼ばれていた。或は御所屋敷とも呼ばれて筆者等が昭和三十六年探訪した時十二メートル程の石垣を見、土地の人に尋ねると「ジョウ」と答えてくれた。南庄は今本堂の在る

所で、産所のあつた所であり、元禄頃本堂に再建された所である。

『熊野年代記』の一五一年は夜討のあつた翌年で、法然上人の十九歳にあたる。法然上人の気がかりなのは母であろう。母の気を少しでも軽くして上げようと思つて、しばらくは美作辺の海上を安らかに運航出来るよう当時海上不安に力のあつた熊野神社に土地を奉納されたのではなからうか。

熊野長吏湛増は

二十年後（嘉応二年）上人三十八歳

の秋、神託によつて水尾の人々にも伝えて熊野へ来て教化して欲しいという書状を黒谷の草庵へ持たせて来た。

恐らく法然上人は熊野へ趣かれたに相違ない。円光大師御霊場第八番、大川寺（西山派）はこの時の旧蹟紀州加太町大川報恩講寺というが、上人の流罪帰路暴風遭難漂着の寺と謬まられるようである。法然上人の教えは次第に拡まって、立教開宗に及んで全国中法然上人の名を知り、「選択の本願の念仏」を理解し味得する者が多くなつた。そして叡山の黒谷から東山吉水へ移転されたのであつた。

母と叔父僧

がはるばる美作から会いたいといつて

来られた。叔父僧は云うまでもなく観寛で、姉弟共に七十歳を過ぎてゐる。女人禁制の山ならば面会など到底出来まい。作家ならばどれほど巧に表現するであろう。法然上人は身近に母の居を調べて朝暮給仕されたと『知恩伝』にある。勿論老後の見送りもされた筈である。しかしそのお墓のようなものがなければならぬが、吉水のほとりに見出し得ない。このような例は隆寛律師も流罪中相州飯山で亡くなつて京都吉水の知恩房の墓にその遺骨を埋めたと『九卷伝』にたしかに載せられてゐるが、現今見出すことが出来ない。

上人の降誕

を数えて八百五十年となる。その間の

変化は驚くべきことであろう。ウラニウムは危険な物質であるがラジウムは人間に役立つ薬品として用いられている。温泉となれば楽しまれる。今までの念仏者は戦争で怖ろしいウラニウムを体験して来た。これから楽しい放射能温泉を味い、念仏しながら人生を送りたいものである。

△新しい研究から▽

わたしとインド

毎月読まさせている『浄土』の編集の方から何か書くようにという依頼を受けた。小生の如き浅才な者にわざわざ執筆を依頼してこられるからには、それなりのお考えがあるからに違いないと、下手な執筆をお引き受けした。ふり返ってみると『浄土』には三回寄稿させていた。だいている。それらを読み返すと随分暴言をはいたものだ。と赤面する内容ばかりである。

今回は、インドに過去三回旅行するチャンスがあり、教えられるところが多かったのでこれを述べたい。

ここで小生の経歴について述べさせていただく。というのはこれがこれから述べる内容と大いに関連があるからである。小生は僧侶と医師の両方の資格を持っている。僧侶は一夏の教師養成講座と二回の教師試験によつ

すぎ
杉 田 暉 道
どう

(横浜市立大学助教授)



て最少必要単位数をとり、増上寺で加行して権律師の位をいただいた。医師は現在勤務している大学の第一回生(当時横浜市立医学専門学校といった)として卒業し、国家試験に合格して医師の資格を得た。ではどうして医師になったのか。これは読者が是非知りたいことであろう。

それは第二次世界大戦の影響による。すなわち当時日本は多くの兵隊を必要とした為に、満十九歳以上の者は特別の理由がない限りすべて兵役に従事せねばならなかった。そして特別な理由には理工科系および医科系の大学または専門学校に在学している者が入っていた。このような事情から小生は本来は文科系の大学を志望する筈であったが、なるべく兵役に従事するのを延ばしたいという願望から医科の専門学校に入った。そして小生が卒業

する頃は、医学界は公衆衛生の分野が花形となっていた。また当時の神奈川県衛生部長は小生が尊敬する立派な人であった。このような環境に加えて、医学は病人を救う学問であるが、それならば病気にかからないようにするのが本当の医学ではなからうかと考えて、小生は母校の公衆衛生学教室に入ることを決めた。

公衆衛生学という学問は病気を予防し、健康な人に対してはさらに健康を増進する方法について研究を行い、その具体的な方法を実施する学問である。したがってこの分野は極めて広く、人口問題、成人病予防、母子保健、老人保健、精神衛生、伝染病予防、地域保健、公害病、職業病など多彩な分野に分れている。小生の勤務している教室では、現在、大気汚染と人体の健康障害との関係、高血圧の予防、および老人保健を主な研究テーマとして取り組んでいる。

始め小生は僧侶と医師は兼業できると思っていたが、次第にこれが困難であると思わざるを得なくなった。それは思いの他に大学の勤務の方が多忙になったからである。また二兎を追うものは一兎も得ずという諺もあることを考え、住職である老父もとにかく健在であり、長男

が僧侶の資格をとり、寺を継いでくれるというので、住居を寺から離れた場所に移した。この境遇でこれからの拙文を書かせていただく。

小生は今日までにインドに三回行くチャンスを持った。第一回は昭和五十年ベンジャブ州のパティアラで開催されたアーユルヴェーダの国際セミナーに出席する為であった。アーユルヴェーダとはインドの伝統医学で、インド全住民の八〇％はこれで治療しているといわれている。これは西洋医学による治療と異り、人間そのものを治療しようとする医学であり、最近次第に注目され始めた。第二回は昭和五十三年ビハール州ブダガヤの村人の健康状態を調査し、合わせて三か月間治療を行った。これが縁となって第三回は昨年、ブダガヤの日本寺に附属診療所を建設する為に、国際仏教興隆協会理事長巖谷勝雄上人の要請でその準備調査の為に出張した。

この三回のインド旅行を通じてとくに強く感じたことを一、二述べると、先ずインドの僧侶は一般の住民から極めて尊敬されており、その程度は日本の比ではないということであった。と同時にインド人の生活の中における信仰の実態をまのあたり見て大いに反省させられると

ころがあった。またインドではいたるところで古代の文明の姿と現代の姿とが渾然こんぜんといりまじっているのを見受けた。さらにすべての動物が全く人間を恐れずにのびのびとしているのを見ると「生きる原点」をここに求められるのではないかという気もした。さらにインド人は議論好きであり、またうそをついても自分を正当化しようとすることや、感謝の念がうすいことなどは、インドの歴史、風土、宗教、社会と密接な関係のあることを知った。

インドは天文学、数学および哲学が古代から発達したが、その理由を考えると、多くの要因があげられるが、小生は気候の影響を重視したい。それは夜になると空一面に大きくてきれいな星が輝き、気温が高いため一晩中でもそれを見ていることが可能である。雨は六月から九月までの間しか降らず、その他の月は乾期で空気が非常に乾燥するので、昼間は摂氏四十度から五十度まで達することがある。このような気候の下では、本能的に自己防衛上体の動きが緩慢となり、瞑想を行い易い環境にあるといえる。このような条件が大きく作用しているので、はなかるうか。

日本人は仏教を情緒的に受け入れたことは多くの人が認めるところであるが、それでは何故このような形で受け入れたのであろうか。小生はこれは気候との関係を無視できないと思うのである。それは日本の気候は春、夏、秋、冬と四季に分かれ、温暖な気候である。このような環境の下ではその住民は、物事を哲学的に考えるより情緒的に考え易くなるのではなからうか。そして長い年月の間にこれが日本人の特性になったと思われる。

かくしてインドに三回旅行したおかげで、物を考える場合に、その土地の風土、宗教および社会などの条件を十分考慮する必要があることを身を以って味わった。

ここで第三回目のインド出張について少し詳しく述べたい。昨年十一月二十四日に巖谷上人の同伴をして成田を出発し、デリー、パटनाを経てブダガヤの日本寺に到着し、ここに一週間滞在した。この二週間巖谷上人といつも行動を共にし、日本寺について上人のお考えなどを十分にお聞きするチャンスを得た。

上人のお考えによれば、将来は日本寺を世界中の仏教の国際センターにしたいという一大構想を持っておられる。その為に今後は医療施設、大講堂、僧堂、図書館、

管理棟を建設する計画である。今回は先ず医療施設の建設が実行に移された。

上人が上記の日本寺の大事業に精魂を傾けて打ちこむようになられた動機については、二つある。その一つは、第二次世界大戦で南方の戦地に向かった同期の士官三十名中、無事帰国したものは僅か八名で自分も幸いにもこの中に入っていた。そこででなくなった人の霊に報いるために本事業を行う決心したという。二つ目は、上人が戦地から帰国後肺結核にかかり胸廓成形術(肺の中の悪い病巣をつぶす為に肋骨を何本か切除する大手術)を受けられた。そのあとが思わしくなく何度か手術を受けられ、医師から見離されたこともあったという。それが今日の体になったのは仏の加護によるものであると感謝し、これに報いる為にこの事業を行っているという。

かくして上人は、毎年少くとも一回は日本寺に行かれること十数年間続いているのである。上人がインドに行かれる時期は如何にインドでもっとも季節のよい時であるとはいえ、日本に比べれば遙かに厳しい気候であることは体験したものでなくてはわからない。とくに上人は前記のように正常な人に比べて体に弱点を持っておら

れることを考えると、ほんとうに頭を下げるばかりである。

また日本寺に前記の事業を行うに必要な面積の土地を借用するのに七年間かかったが、小生が日本寺に滞在している時にビハール州の関係機関とのすべての契約が終了したのである。インドではこのような問題については袖の下が極めて効果があることはよく知られている。が上人は一切そのような事はされずに、正々堂々と根気よく交渉されて成功された事実は、大いに学ばねばならぬと心から感じた。

このような経過を経て、愈々診療所を建設することになり、来年早々には完成して実際の活動を始めることになっている。小生は仏教徒の一人としてかねがねチャンスがあればこのような医療を行いたいと考えていたが、仏縁によって診療所の運営に協力して欲しいという上人の依頼を受け、微力ながらお引受けした。今後は出来る限りの努力をして、日本仏教の社会活動の真髄を発揮したいと願っている。日本の仏教徒の熱烈な精神的、物質的援助をお願いする次第である。

〈随想〉

ほとけとの出会い (十六)

佐 隆 三
たけ りゅう ぞう
竹 隆 三

(大正大学教授・医博)



仏教の時間論に関連して、「末法思想」の形成とその推移・展開に興味をおぼえ、主として石田充之先生の研究論文から多くのことを学びました。

結論的なことを最初に申し上げるならば、末法法滅思想は、「その超時間性その超越性に墮眠を貪り易い性格をもつ仏教を恒に時間性の危機の中にもちこみ、その眠りに衝撃を与え、眠りを醒す思想として、その思想の存在意義は、仏教それ自体にとつてもきわめて重要である」ことを理解することができました。

キリスト教に終末観やキリスト再来復活論があるように、末法思想も宗教的な伝統の中に必然的に出

されくるものであるかもしれないと思います。

末法思想は、過去の釈尊在世の時代は理想的であつて美しく、現在はずっとも墮落した悪なる非理想的な時代であるという史観に立つものであります。

仏(釈迦仏)の入滅年時を起点として、五百年または千年の間が、教えによつて行じ証するという教行証の三法が完全に具足せしめられる時代であり、その後の千年(または五百年)が教えによつて行ずるにとどまる像法時代であり、その後の一万年が教えのみあるにとどまる末法時代であつて、末法万年後仏教は滅亡するといった思想であります。

像法とは像似(そうじ)という意味、すなわち正法に似てお

るのみで実質が少なく形式化してくることを意味し、末法は教えの実行者もなくなつてゆくという意味で、仏教の時間的歴史的な衰退観・衰滅観を示すものが末法思想であります。

その原因としては、

(一) 教法の影響力・感化力が時間的に衰退してゆくこと

(二) 教法を受けるものの実行力が次第に後退してゆくこと

(三) 時代の進展につれて非仏教的な方向へと悪化してゆく政治的・社会的・歴史的諸状況の反映

などが考えられるのでありますが、「末法五濁」(劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁)と示される五濁悪の思想などがさらに深く関係してくるものと思われま

す。

釈迦如来かくれましまして
二千余年になりましたまう

正像の二時はおわりにき
如来の遺弟悲泣せよ

末法五濁の有情の

行証かなわぬときなれば

釈迦の遺法ことごとく

竜宮にいりたまいにき

親鸞のこの悲痛な叫びの中に、鎌倉仏教全体にみ
なざる末法濁悪世悲歎の一端がうかがわれるのであ
ります。

仏教のような宗教的な実践道、宗教的な哲学・思
想は、偉大な生きた人格を通して、発揚されてくるも
ので、その創唱者釈迦の入滅は直ちにその教法の衰
滅に関係せしめられてくるのであります。

懷惑(善導の弟子)の「浄土群疑論」によれば、末
法法滅思想が未来仏弥勒に関連をもたされ、法滅と
いうことの下に法の永世といった思想を孕ましてい
ることが注意されるのであります。

経律論の中国への段階的な流入と、中国それ自体

内の仏教体験の深化や、または仏教者の墮落、外的な思想的、政治的、社会的な仏教破壊などの諸条件が相俟って、正像末の三時思想を内容とする、いわゆる整えられた末法思想が中国に次第に形成されてきたのであります。それは、中国に仏教が入り始めてより五・六百年後の南北朝時代（四二〇—五八一）の終わりより隋（六一八—九〇八）初に亘る時代であります。

後の日本における末法思想の具体化も、大体同様の年月を要することが注意されますが、そこには、各民族への仏教体験の受容と時間と歴史の拘わり合いを深く考えさせられるのであります。一定の年月を経過すると、一面体験の深化があると同時に、他面において形式化・因襲化をきたし、外的な種々の迫害などが起こってくるという歴史的事実を考えさせられるからであります。

曇鸞は彼の主著「往生論註」の初めで「五濁の世・無仏の時」と五濁惡世思想は力説しておりますが、像法思想を示すにとどまっております。

しかし、天台の慧思、三階教主張の信行、浄土教

主張の導緯、律の道宣、法相の窺基等になると、正像末の三時の理念を整えたいわゆる末法思想が急速に實質化され具体化されてくることに注目されます。

信行は、「大集經」などによる仏滅を規準とする第三階時の今日今時の人間存在の末法的な自我欲中心のあり方を深く追求し、その時（末法時）機（邪惡極まる人物）相應の実践仏教として三階仏法をとくに提唱し、現実の人間存在（機根）に対応（対）して、実体的な実践（行）をいかに実践すべき（起）かをとくに明らかにし力説したのであります。

道緯は、末法の現代は浄土門他力易行道に帰し、「大無量壽經」に説く第十八願の本願に誓う称名念仏をこそ実践すべき時であることを力説したのであります。

信行は末世五濁惡世觀の徹底的深化の中に仏教的な根本真理、第一義諦に直接的に徹しようと苛烈な一切礼拝念仏、乞食行の実践を打ち出し、道緯は末法五濁惡世觀の徹底的深化の中に、本願他力念仏易行道の実践を主張したもので、両者ともに、ひろい

意味での末法思想観を同じように切実に把握しつつ、難行道聖道主義と易行道浄土門凡夫道主義とに大きく実践上分かれてきております。

それは、後の日本の鎌倉期の仏教にも同様にみられてくる傾向であります。いずれにしても、末法末世、五濁惡世の法滅という、仏滅を規準とする時間性・歴史性に深く拘わりつつ、人間の現存在性を深く追究して、その時間性・歴史性を超える新たな絶対的仏教的実践の道を打ち出してゆこうとする態度は同じであります。

道綽の弟子善導は、末法時代のわれらは愚痴にして罪業深重なる故に、弥陀の本誓願により念仏して極楽に往生し証るべく、末法現在時の惡人であることは、怯劫永遠の絶対的な惡に沈没する意味であることを明示し、念仏往生すべく勧めているのであります。

そこには、正法像法をうける末法という時間性・歴史性に拘わって人間の存在性を内省しつつ、怯劫より已来常没常流轉する者という時間性・歴史性を超えた人間の罪業性を深く引き出して、このような

原点に立つ念仏救済が強く訴えられており、また、末法万年法滅という時間性を超えての本願念仏法の絶対永遠的存在性・救済性を打ち出そうとされているのであります。

浄土教系において、末法法滅思想はますます五濁惡世思想をもつて内容づけられ、末法法滅の時間性は、時間性・歴史性に関わりつつ、それを超える人間存在の絶対的罪業性の場に位置づけられてきたことは、わたくしにとって興味深いことに思われるのであります。

そして、浄土教的な伝統が、末法五濁惡世の今時、愚痴無智なる罪業深重者の真に救われ証る道は、念仏浄土願生の実践道以外にはないと、末法思想の深化の中に主張することは当然のなりゆきであり、末法法滅といった時間的・歴史的な衰滅觀の中に、時間的歴史性を超える新たな再生の絶対的実践道としての「念仏一道」が打ち出されるのは、もともとなこととして納得がいくのであります。

(つづく)

翔 ぶ (一)



「翔ぶ」と題名を書いたものの、私ははたと困惑してしまった。自らの意志で空を飛んだのは、遙か昔のことだからである。昭和二十年、敗戦間際の六月から七月へかけて一カ月間、初級の滑空訓練を受けたのが、私の唯一の飛行歴である。あの年は長梅雨で、雨の晴れ間を縫っての訓練だったから、全部で三十回乗っただろうか。累計の滞空時間も三分に満たなかったと思う、と書くとき奇異に感じる方もあるかと思うが、グライダーを引

木の^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

く動力は腹をすかした十三、四歳の中学生十六名の力だけであるから、たいしたことはなかったのである。

私が松山中学に入學したのは昭和十九年である。スバルタ教育で有名だった。虚弱体質の私を、「よくはいれたねえ」と不思議がりもし、「大丈夫かな?」としごきに耐えられるかどうかを危ぶむ声もあったが、私自身は人並にやっつけける自信はあった。しかし、胸囲と体重は相当見

劣りしていた。農繁期、勤労奉仕で出征兵士の農家へ手伝いに行くと、その家の老人が哀れがって碌に仕事をさせてくれなかったくらいだから、押して知るべしである。入学直後からいろいろな勤務に従事させられた。援農もそうだが、決潰した堤防の修理、松山基地での掩体壕造りと、土方するため中学に入學したようなものであった。掩体壕造りは重労働だったが、海軍の新鋭機が間近に見られるので、あまり文句も言わずせせとモッコ担ぎに通った。午後二時に作業が終ると、私たちは遠廻りして飛行機の格納してある掩体壕を覗いて見聞を広めるのに精を出した。零戦、艦爆彗星、偵察機の彩雲、局地戦闘機の紫電、紫電改などが翼を休めていて、機体によじのぼって操縦席を覗き込んだりしても、別に整備兵に注意されることもなかった。スマートな零戦や彩雲に比べると、紫電や紫電改はずんぐりしていて、アメリカの艦載機グラマンF6Fに酷似していた。

「よく間違えられて味方の高射砲に射たれる」整備兵たちはそんなことまで話してくれたし、

「坊ら、こういう歌を知っているか」と言って、『誰か故郷を想わざる』を教えてくれたりした。この歌を歌う時、彼等は一様に放心したような目をしていて。望郷の念が胸裡を去来していたのであろう。哀調切々たるものがあった。後年、この歌を聞くたびに、私は彼等のことを思い、そして、霧島昇よりも彼等の方がうまかったなと思うのである。

昭和二十年三月十九日、呉をはじめ西日本の主要基地を襲ったアメリカの艦載機群に壊滅的打撃を与えたのは、松山基地の紫電改だったが、四月下旬のB29の爆撃に対しては、迎撃に飛び立つ戦闘機は一機もなかった。主力はすでに九州に移動しており、松山基地はその機能を失っていたのであるが、私たちはそんなことは知る由もなく、七、八百メートル手前の麦畠の中でこの爆撃の一部始終を目撃した私たちが切歯扼腕しても後の祭りであった。その日の作業は中止され、昼頃私は家に帰った。横丁の路地を曲ると、百メートルほど先の家の前に母が一人で立っていた。

「まあ、ご無事で……」と、どこかの小母さんに声をかけられた。「お母さん、朝からああして立っておられたんよ、はよ帰っておあげなさい」私を認めると、母はつと家の中に姿を隠した。私が家に帰り着くと、母は薄暗い部屋にベタンと坐っていた。そして、「ほんとに帰って来たんよね」と、ポツンと言った。

私はそれを聞くと、母の思いが深く心に突きささって、やりきれない気持になった。と言うのは、四月の新学期から、三年生以上は新居浜の工場へ動員されて、『防空要員』という学校警備は、自転車で十五分以内に登校出来る二年生にお鉢が回って来た。私もその中に含まれていたの
で、警戒警報が出ると夜間でも早々に登校しなければならなくなった。昼は飛行場で掩体壕造り、夜は夜で夜警の仕事と、十三歳の少年には苛酷な日々が続いていた。一晩に二度登校することも珍しくなかったから、その都度私を起こさねばならない母は殆ど睡眠らしい睡眠をとっていなかった。従って当の私よりも母の疲労の方が激しかつ

た。元来あまり丈夫な方ではなかったから、このままでは母は死んでしまふ、なんとかしなければ、と思つても、私にその才覚があるはずはなく、この直後出された滑空訓練生の募集はまさに渡りに船で、私は早速応募した。私がいなければ母も少しは眠ることが出来るだろう——私が先ず考えたのはこのことだった。ただ応募したことだけは黙っていた。言えば反対されるのは目に見えていたからである。採用が決定して、「行くよ」と私が言うと、「お前もその方がよう寝られるかもしれん」と、母は反対しなかった。決ったことは仕方がないと諦めていたのかもしれないが、それほど睡眠不足が深刻だったのも事実である。

六月四日、私たちは松山から東の山間へ軽便鉄道で四十分ほど入った、見奈良というゴルフ場の跡地にある訓練所に入所した。各中学の二年生から選抜された百名の混成集団で、いまで言うエリート校だった松山中学の生徒には何かと風当りが強かったが、班分けが済むと自然に同志的結合が生まれ、それほどの障害はなかった。家にいる時

より食事は更に貧しくなったが、警戒警報が鳴っても飛び起きる必要もなかったので、私にすればこの合宿は別天地であった。

初め私たち第三班に宛がわれたのは『朝日改五型』という、おそらく朝日新聞が発売した機種だと思いが、操縦席の前には何もないなんとも頼りない機体で、右手で操縦桿を握ると、左手のやり場がなく、座席の下へ持つていくしかなかった。

もし落ちたらどうなるのだろうかという恐怖心が先に立って、他の班の、前に支柱があつてそれを左手で確保出来る『文部省型』という機種が、うらやましくてならなかった。おまけに私は体重が四十キロ前後だったので、土囊を座蒲団代りにして機体のバランスを取つていたので、前屈みにならなければ操縦桿に手がとどかなかつたし、フットレバーにもようやく足がかかる有様で随分苦勞した。幸い『朝日改五型』は翼を折つて使い物にならなくなつて、『文部省型』に替つたので、翼端着陸をして翼を折つた奴にはみんな感謝したものであった。訓練は左右に分れてゴム索を引く者十

六名、教官の補佐一名、尾部で杭に短いロープを巻きつけて機体を固持する者一名、左翼端を持つて機体の安定をはかる者一名、搭乗者一名で、一度飛ぶと、翼の保持者が搭乗に廻り、尾部の者が翼へ、補佐が尾部へ、左のゴム索の最先端を引いている者が補佐へ、右のゴム索の最先端が左の最先端へと順ぐりにくりあがつていくシステムで行われていた。だから搭乗は二十回に一度、次の搭乗までには十六回ゴム索を引き、重い機体を着陸点から出発まで運ばなければならなかったが、早く飛びたい一心で肩に食い込む重量もさして気にならなかった。飛ぶという目的であるから、飛行場でのモッコ担ぎより楽であつた。

私の初滑空は二度目の搭乗の時であつた。地上滑走といつて、操縦桿を前に倒したままズルズル地上を引きずられる訓練中、機首が草に隠れた小岩に当つたショックでひよいと操縦桿を引いてしまった。慌てて前に倒したので一メートルほど跳びあがつてすぐ地上に戻つたが、ほんの一二秒地上を離れた時の感触はいまもむずがゆくなるよう

な感じで残っているし、旅客機に乗っても離陸の時には必ずこの感触を思い出すのである。

梅雨の晴れ間を縫っての訓練も、警戒警報の発令でしばしば中断され、はるか上空を翼端から四条の飛行機雲を引いて呉方面へ向かうのを、私たちは近くの梅林に待避して、その透き通るような機体を目で追ったものだった。敵機を美しいなと感じたのはその時である。悠々と通り過ぎると、そのあとからグオングオンという独特の爆音が機体に追いつくように響いて来た。これから何時間かかってサイパンの基地まで帰るのだろうか、旅路の平安を祈ってやりたい気持ちすらした。

七月三日、退所式の日、その日の訓練を早や目に終えて宿舎に帰ったあと、若い教官は急にもう一度やると言って、私たちの班だけ訓練所へ引き返させた。班内に一人、腸炎を患って訓練課程の遅れているのがいたので、二、三度乗せてやって課程を終了させてやりたいという親心だったのであるが、正直言って、私はもう結構という心境だった。先刻帰り道で右の脹脛を蜂にさされてズ

キズキ痛んでいたからである。

機体の組立が完了した時は、日はもう大方西に傾いていた。平和そのものの眺めであった。

この技倆不足の訓練生の第一回目の搭乗の時、事故は起きた。山間の訓練所は夕方になると急に風向きが変わることがあるが、その時もそうだった。左のゴム索の中ほどを引いていた私に、風にあおられた機体は真直に突っ込んで来た。避ける暇もなかった。右腕の付け根を引っかけられた私は二度三度跳ねとんで地上にたたきつけられたということであるが、全く記憶にない。息苦しくて気がついた時、顔中血のまじったオキシフルの泡だらけで、泡が鼻孔をふさいでいた。泡を拭いた左手の甲からも血が噴き出していた。

暮色を深めた空の碧さと、やや色褪せたゆっくり移動している夕焼雲が、周りを囲んでいる仲間の顔の隙間から見えていた。

「ああ、とんだ退所式になってしまった」と思った途端、また私の意識は薄れて行った。

(つづく)

俳句作法 (二)

河野喜雄

(文芸評論家)

二 与謝蕪村の句より

与謝(又は谷口)蕪村(一七一六—一八三三)は、芭蕉歿(一六九四)後、二十二年後の出生であるが、芭蕉以後における、屈指の俳人の一人であることは、周知の通りであり、また彼は、俳人であるのみならず、当代の画家として、池大雅と併称せられたほどの、大家であった。

その彼は、実に芭蕉の心酔者であったのであって、その「芭蕉翁附合集序」(一七七四)において、彼は次のように言っているのである。

はいかいの継句をまなばんには、まづ蕉翁の句を暗記し、付三句のはこびをかうがへ(考へ)しるべし。三日翁の句を唱へざれば、口出はら(棘)を生ずべし。その彼について、もう一つ言っておかなければならないことは、他でもない、彼が、近代抒情詩を先駆けた人物であったことであり、有名な「春風馬堤曲」(一七七七)が、その何よりの証左であらう。

すなわち、彼は画家であり、抒情詩人であったので、俳人としても、勿論、当代随一の人物ではあったが、その晩年においては、真の俳句的俳句と推し得るものを吟

出してはいるけれども、その当初においては、多分に抒情的・観念的であつたために、私のいわゆる「三絶」中二絶が不充分であつて、真の俳句的俳句ではない。

彼は、芭蕉句にヒントを得てのいくつかの句を作っているが、それに拠れば、彼のその弱点が、ハッキリと窺われる。

芭蕉に有名な、左の一句がある。

よくみれば薺花さく垣ねかな（続虚栗）

右に拠った蕪村句が左句である。

琴心桃美人

妹が垣根三味線草の花咲ぬ（几童初懷紙）

なるほど、芭蕉句の垣根を「妹が」と、一応具体化はしているが、「薺」を「三味線草」と美化したものの、字数を倍にもして、何よりも一句のテーマ自体が、その「琴心桃美人」の前書にも窺がわれるように、余りにも抒情的・観念的に過ぎる。

「よくみれば」という芭蕉句が、「よく見」なければ見えないような、しかも「よく見る」と、桜の花を小さくしたような、美しい薺の花を、実に場所的に的確に捉えているのに比して、彼の句が、到底、比肩しがたいこ

とは、明らかであろう。

それから、これは芭蕉句ではないのであるが、蕪村頃までは芭蕉句とされていた。

落ちざまに水こぼしけり花椿

一艇

の句に拠つて、蕪村は、

椿落ちてきのふの雨をこぼしけり

と吟出している。

その「昨日の雨」というのが、彼の狙いだつたのであらうが、椿がこぼす水ならば、前夜の夜露か、雨かに決まっている。敢てその「きのふの雨」を言いたかつたのは、これまた、彼の抒情性・観念性に他ならない。

そんな、判り切つたことを言わずに、「落ちざまに」と、その態様の限定をハッキリしている一艇句の方が、流石に芭蕉作品と誤まれたほどの、俳句性が高いではないか。

さらに彼は、

海くれて鴨のこゑほのかに白し（甲子吟行）

の芭蕉句に倣つて、

更衣こしもの野路の人はつかに白し（句集）

の一句を吟出しており、この一句は、主体的、場所的・

態様の限定が、画家的に相当的確なので、蕪村句としても、佳句と言えるではあろう。

けれども、その一句における象徴的高度が、私がすでに述べておいたように、「死の世界」・「生の声」・「生ける証し」と、実に弁証法的に的確に、テーゼ・アンチテーゼ・ジンテーゼを示しており、故にこそ、「ほのかに白し鴨のこゑ」とすれば、チャント五七五になるものを、敢て五五七の表現形体を採っている芭蕉句のそれには、到底、及ばないであらう。

大体、右述したような蕪村は、そのほかにも、沢山の抒情的観念句を作っているのであるが、今、その代表的なものだけを、挙げておこう。蕪村のいわゆる名句である。

ゆく春や逡巡として遅ざくら (句集)
春月や印金堂の木のまより (〃)
春雨や小磯の小貝ぬるるほど (〃)
指南車を胡池に引去ル霞哉 (〃)
春の海終日のたり (古選)
白梅や墨芳しき鴻鷗館 (句集)
梅咲と帯買ふ室の遊女かな (〃)

紅梅や入日の襲ふ松柏

(夜半叟集)

甲斐がねに雲こそかれ梨の花

(〃)

秋たつや何におどろく陰陽師

(句集)

門を出れば我も行人秋のくれ

(〃)

月天心貧しき町を通りけり

(〃)

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

(〃)

いな妻のうつるや暁のわすれ水

(夜半叟集)

おちこちおちこちとうつ砧かな

(新選)

憂(き)我にきぬたうて会は又止ミネ

(続明鳥)

鮎落ていよいよ高き尾上かな

(文集)

柳ちり清水かれ石ところ／＼

(反古叢)

私が傍線した句には、その傍線個所に、蕪村の抒情的観念性が、かなりハッキリと露呈せられており、ことに、「印金堂」とか、「鴻鷗館」を持出したり、「指南車」とか、「陰陽師」とか、「鳥羽殿」などを引っ掛けているところに、それが顕著であることは、誰しも納得するであらう。

その傍線しなかった句は、秀句と言ってもよいほどの句であって、ことにその「甲斐が根に」の句が秀れているが、この句は、おそらく、芭蕉歿年の名句、

六月や峯に雲置あらし山

〔笈日記〕

に学んでの一句であって、蕪村句の代表句の一つと言つてよからう。その「六月」と「梨の花」との季題を異にするけれども、「峯に雲置」と「ねに雲こそかれ」とは、ともに高山または名山の山顛に静動する雲を捉らえ得て、よく一句を玉成している、と言えよう。

なお、「小磯の小貝」の句も、「おくのほそ道」旅中における芭蕉の、

いろの浜に誘引れて

小萩ちれますほの小貝小盃

〔泊船集〕

の一句における、「小貝小盃」の頭韻法に倣ったものと思われる。

大体、上述したように、蕪村が、当代における、屈指、あるいは、随一の、抒情詩人であり、画家であったことは、略々疑いないであらう。

しかしながら、「俳句」（これは現代的命名であって、本来は「発句」、すなわち、連歌における首句を意味する）僅々表音文字、十七字のみを以て、その表現形式とする、この世界最高、至難の「詩」型式は、芭蕉自身が、ハッキリと言っているように、

むかし、先師、凡兆に告て曰、「一世の内、秀逸の句三・五あらん人ハ作（俳か）者也。十句に及ん人ハ、名人也。」

〔俳諧問答青根ヶ峯 答許子問難弁〕

であって、俳句というものは、たとえば、芭蕉級の大名人であってさえも、一世に十句程度しか作れない——というのであって、それは、逆説すると、蕪村のように、抒情的・観念的な表現では駄目であり、そのような境地を止揚したところの、「虚心思邪」による、対象の「本質的把握」こそが、俳句の本質であって、その「本質的把握」の理念こそ、他ならぬ「さび」（「さび」は「然び」の音変語であり、事物の「本質的表題」を意味する。「万葉集古義」に、「さびは「然儀」の意なり」とあるのみならず、「或説」として、「さびといふは、内なる物の、おのづから外にうかび出るを云」と挙げており、「さび」が「然び」の音変語であって「少めさび」が、女性が、女性らしく、その「本質を表頭」していることを意味する例でも明らかなように、「さび」は、事物の、本質的表頭を意味する語なのである。

当代随一とも言える文化人であり、詩人・画家であった蕪村は、その俳人としては、当初においては、非俳句

的であるところの、多分に抒情的・観念的なもののみを
作句していたのであったが、流石、当代の第一人者級と
して、彼はその晩年においては、やっぱり、真の俳句的
俳句を作っているのである。

彼は、享保末年（一七三五）頃、郷里の摂津国（大阪市
都島区毛馬町）から江戸に出ていたのであるが、宝暦元年
（一七五一）京都に移住、爾後、京阪地区において、その
半生を過しており、その移住は略々三十五歳頃であった
が、やはり江戸よりも、長年の古典的伝統の存した京阪
地区においては、その古典的伝統、すなわち、芭蕉自身
の語に明らかなような、西行・宗祇・雪舟・利休を通ず
るところの、「本質探究」の伝統——に諸観したものもの
如く、それを立証するのは、左の一句ではないか、と私
は信ずる。

なには女や京を寒がる御忌詣

（句集）

「御忌」とは、浄土宗の宗祖・法然の忌日法会であつ
て、京阪地区の庶民が、多数参集したのであったが、そ
の参集した。大阪女が、京都は寒いので、大声に大阪弁
で「寒い」と言い合っている事実が、まさに如実に表現
されており、これこそ、真の俳句的俳句である。

村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『全 訳 法然上人 勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師 観経四帖疏』

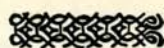
B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師 六時礼讃』

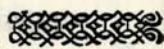
B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人 讃仰会

浄土句集



一田牛畝選



福岡 安藤平次郎
冬山のいただき透し夕茜

福岡 原敬二郎
瀬戸内の海も借景庭紅葉

群馬 島津 か寿
年の暮辞書の被いをかけ代ゆる

より単線である。きつと無人駅で日頃は静かしい。

福岡 高良 慈風
野菊坂絵踏みの石と教えられ

評 年の暮になれば年用意で仕事が山積しているが、永年使った辞書の被いも甚しく破損しているので繕うばねばならぬ。

福岡 前田 秀峰
あととりにあととり産れ十夜寺

福岡 上滝津弥音
うとくと孫とまろび寝縁小春

東京 細田 初枝
阿弥陀経洩る尼寺や薄紅葉

評 あととりに嫁を貰ったが産れるのは女ばかりで、やつのことで男が産れたのである。和尚と檀家の安堵如何ばかりならん。

三重 森 静枝
一人居の虫の声聞くそんな夜

評 薄紅葉に包まれている尼寺は寂しく静かで、阿弥陀経が流れて来る。かけ込み寺もこんな雰囲気ではなかりしや。

東京 田中 秀代
あらぬこと気にかゝる日や秋時雨

福岡 服部 光代
冬ぬくし老母と三里の灸すゆる

東京 栗原とも子
こゝよりは単線山茶花咲ける駅

評 秋は日短かで心は急くのであるが、気にかかることがあれば、あれやこれやと落ちかぬのに、雨ともなれば尚更だ。

福岡 行正 明弘
玉霰掌に融てゆくあわれかな

評 山茶花が咲いて乗降車客も少く、ここ

山口 三井 寛静
朽紅葉島に住みつuki句碑を守る

着ぶくれて達磨の如く老ひ給ひ
福岡 荒牧 還愚

朴葉焼料理楽しき秋の旅
東京 吉原登起子

賀状書き了えて門主のおん計音
大分 丹羽 難中

秋天を突き上げ松の鳩巢立つ
埼玉 佐藤 泰子

注連作り声弾む程はかどらず
福岡 高良 幸代

一代の大法要や秋晴るゝ
福岡 行正一如子

秋嵐夜半の雨戸をたゞきけり
東京 吉田ゆきあ

お十夜の礼拝回向こだまする
山口 上野 明達

南塀の日向水仙よく匂ふ
福岡 釈河野ねはん

料亭の庭に一叢竹の春
東京 栗原やえ子

木蓮の蕾ふくらむ開山忌
山梨 青山富貴江

水車小屋住む人絶えて破れ芭蕉
福岡 松崎たか女

薄紅葉よき吟行でありしこと
東京 真野よし子

萩枯れて淋しくなりし寺苑かな
東京 小笠原香祥

唐辛子大炊に干し山の家
福岡 藤村八千代

石段を登ればくらむ霧の闇
東京 新井 新王

紅葉の一雨毎に美しく
東京 猪瀬 幸子

娘の縁をたのむ出雲へ秋の旅
福岡 木下富士女

真心の手編みのショール送り来し
東京 末常てる子

松林一点紅葉なすところ
東京 満尾有衣子

芽柳や櫓一つの城の址
一田 牛畝

芋の露揺れ寄り合ひてきらめけり
東京 阪入志津枝

元朝の看経殊に声高く
福岡 権藤みきを



M氏のこゝと

村^{むら}下^{した}武^{たけ}司^し

(弁護士)

一

節分がすんだばかりの二月の初めである。一日の仕事が終り、ほっと一息入れて帰る仕度をしている所に、「今晚は」と来客である。こんな時間に一体誰だろうと思つてドアを開けると、姿を現わしたのがM氏である。M氏と一別したのは確か昭和四十九年の正月すぎであるから、丸々八年振りの再会である。

M氏はかつてM鉄鋼株式会社の社長であつた。社長であつたということは、既にM鉄鋼は存在しないのであ

る。あのすさまじい旋風で経済界を混乱に陥し入れたオイルショックで倒産してしまつたのである。彼は京都大学を卒業し、富士製鉄（新日本製鉄の前身）に入社して、十余年勤めたが昭和三十六年退社し、M鉄鋼株式会社を創設、主に鉄鋼材を取扱っていた。M氏生来の才能と時あたかも高度成長期の波に乗り、M鉄鋼も急成長し、昭和四十八年頃には月商三億円位の売上げがあり、社員も三十数名いる中堅どころの鉄鋼商社となつていた。私はM氏がM鉄鋼を創設した時から顧問弁護士として彼の相談相手を勤めてきたのである。個人的にもよく銀座かいわ

いに飲みに行く飲み友達でもあった。

二

M鉄鋼はオイルショックをともに受けた。それまでは景気が良すぎたので、時々お調子に乗ってはいけなさと、注意していたくらいである。それがオイルショックによって売上げが下降し始めたのである。しかし、ふくれ上った経営を急に縮少することは極めてむずかしい。

そこへ決定的なダメージがおそって来た。昭和四十八年十二月初旬、M鉄鋼の販売先であるY建設が不渡手形を出し倒産してしまったのである。M鉄鋼のY建設に対する債権約三億円が駄目になってしまったのである。M鉄鋼は絶体絶命の窮地に立たされたのである。それからM氏は銀行、仕入先等と昼夜を分たずかけずり廻って資金手当てと支援体制作りに揮身の努力を重ねた。私も微力ながら種々骨折ってみた。然し、銀行側が資金援助を断って来た。万事休すである。遂に翌年の一月末日M鉄鋼も不渡手形を出し、倒産という最悪の事態となった。M鉄鋼の負債総額は約九億円、債権者約八十社であった。早速債権者集会を開き、長時間にわたる激論の末、M鉄鋼

は任意整理によって清算することとなった。倒産会社の整理清算といえは、言葉はいと簡単であるが、債権者対倒産会社、債権者対債権者の利害がむき出しに衝突して火花を散らし、まさに資本主義経済社会の地獄図である。

三

債権者集会を何回か開いて、債権者委員長が選任されて整理清算の基本方針が決り、会社資産の保全も終り、ようやく整理清算が軌道に乗り始めた三月の初めだった。M鉄鋼から「M社長が債権者に連行され、箱根のホテルに監禁された」という緊急電話である。社員から事情を聴くと債権者のA社、B社、C社の委任状を持った暴力団風の男五、六名がM社長を朝方自宅から連行して箱根のホテルに監禁した模様であるとのことである。私は直ちにそのホテルに急行した。ホテルでは、A社B社C社の社長と人相の悪い男達に囲まれたM社長が、声高に議論していた。早速話を聞くとこういうことであった。A、B、C社はM鉄鋼の倒産により自分達も倒産を免がれない危機的状態にある。是非M社長個人自宅も処

分して債務の弁済に充てるべきだ、とA社らの社長は強硬に主張し、M社長は会社と個人は違うのだから、自宅を弁済に充てる義務はない、とこれまたがんとして肯じようとしなない。そこでA社らの社長はM社長をホテルに監禁し、暴力をも加えかねない勢いで、自宅処分の承諾印を取るべく暴挙に出たのである。私はA社らの社長に暴力監禁は如何なる理由があろうとも違法行為であり許せない、M社長は取敢えず連れて帰る、自宅の問題はM社長とよく協議し、後日はつきり回答する旨話し、私の前に立ちほだかる暴力団風の男達には目もくれずホテルを出て、M氏を無事連れ戻すことができたのである。

四

監禁騒動があつてから二週間ぐらい経過した。上野の山の桜が咲き始めた頃の夜である。M氏と私とで私の事務所で話し合っていた。その日までに数回彼と激論を闘わせた。否、激論したというのではなく、彼が私に自宅の処分だけは何とか勘弁して欲しいと繰り返し哀願するのである。私はM社長に、「原因は如何にしろ、多くのお客様に迷惑を掛けたことは厳然たる事実である。その

責任はM社長にあることはM社長自身認めるところである。他人様に迷惑を掛けた以上それを償うのは人間として当然である。暴力団におどされたから自宅を処分するのではなく、人間として尽すべき最少限の義務として自宅も処分して債権者に弁済し、迷惑を最少限にすべきである。このことはM氏の人間としての当然すぎる当然の義務である」と、それこそ口をすっぱくして説得したわけである。これに対して、彼いわく、「M鉄鋼の倒産による法律的道義的責任を果すために、M鉄鋼の資産は何一つ隠さずすべて債権者のために提供した。然し、法人とは法律的には全く別である個人の資産、それも自宅を債権者のために提供する法律的な義務はないはずである。まして、自宅を処分すれば、女房子供は住む家もなく路頭に迷うことになる。それでは女房子供に申訳が立たない。女房子供に対する最少限の生活の場だけは残してあげるのが私の最後のつとめではないかと考える。何としても自宅だけは残したい」というのが彼の最後の願ひであった。暴力団に監禁されても、頑として肯じなかつた彼としてはもつともな言い分である。

私は彼の言い分が痛い程わかる。しかし、私自身も最

終的には判断できかねた。その晩も例によって例のごとく、議論がぐるぐると同じところを廻わるだけである。時計は、もう十二時をとくに過ぎてゐる。私も正直いって疲労困憊の極限状態にあった。「M社長も敬けんな念仏の信者である。そのことを今どう言おうとは思わないが、他人様に迷惑を掛け、心のこりのままでは往生も出来んだろう。全く往生際の悪い奴だ。自宅を処分したところで全債務を弁済できるわけでもないが、ここで、女房子供のためといって自宅を残してみろ、絶対極楽往生はかなわないと私は確信する。ここできれいさっぱりと自宅も投げ出して、ほんとうに出直してみろよ。必ずや、平和な光に満ちた新しい生活を得ることができ。そのことを決心する君の心的態度が必要なんだ。これは自宅の処分ではなく心的態度の問題だと思う」と私が言ったとたん、彼は狂ったように怒り出し、「先生は何を言い出すんだ。そもそも弁護士は、依頼者の利益を最大最高に擁護する法律上の義務があるんだ。それをこともあろうに、信仰の問題まで持ち出して私を不利な方向に説得することはけしからん。君なんかに頼んだのが間違いだつた」とすごいけん幕である。私は唯々恐縮し

て、「いやいや、社長を不利に説得しようなどとは毛頭思っていない。私は弁護士としてではなく、君の真の友人として君のことをほんとうに想つて言つたまふだ。君は善導大師の日没無常偈が大好きだといつていただろう。そのことをちょっと想い出したものだから、君のほんとうの心を想つていつたまでだ。女房子供が大事であることもよくわかる。そして君の女房子供に対する優しい愛情もよくわかつた。私の言い過ぎだったら勘弁して欲しい」と私は彼に心からおわびした。

然し、彼はますます怒り出し、「目没傷までも持ち出すとは、先生も卑怯極まりない」と大きな目玉をますます大きくむき出し、身を震わせ、椅子をひっくり返して私の事務所を飛び出し、夜更の街に姿を消しました。その夜は、妙になま暖かく、半月が西空のビルの端にかつていたことが、今でもまざまざと臉に残っている。

五

翌日M氏のところに電話したが、昨晩は自宅に帰らなく連絡が取れないとのことである。それからはヨウとして連絡がなく行方さえ判らない。私自身も心当りのとこ

ろを当ってはみたが全く手掛りは得なれなかった。この時は全く私もまいってしまった。私は間違ったことを言っていたのではないだろうか、彼にもしものことがあったら……と心は千々に乱れ仕事も手につかない状況であった。ところが五日目の朝、彼は予告なしに私の事務所を現わした。「色々考えに考えたが、自宅を処分することにしたよ。先生に一切を委かせる。ただA社ら特定の債権者にだけ配分するのではなく全債権者に平等に配分してもらいたい。これだけはお願ひしておく」と如何にも晴れ晴れと言いつつ、登記簿権利証、委任状、印鑑証明書等、売却に必要な一切の書類の入った紙袋を私に渡すと、さっさと帰っていつてしまった。私は「そうか、よく決心してくれた」といって、思わず彼の後姿に手を合わせて拜んだが、その時には既に彼の姿は消えていた。

それからの清算事務は、誠に円滑でスピーディだった。M氏及びその家族は住みなれた家から、木賃アパートに引越し、家、屋敷共に売却処分し、債権者には債務の三八%を配当して清算手続の一切が終了した。倒産から十カ月しかかからなかった。そして、彼は昭和四十

九年のお正月が過ぎると、彼の故郷である広島県の田舎町に家族共々引き揚げて行った。

六

それから八年の歳月は流れた。もはやM鉄鋼のこと、M氏のことも忘却の彼方に消え去ろうとしていたのである。

そのM氏が、突然私の前に現れたのである。誠に驚愕と、喜びと、そして過ぎしことごとくが、胸に去来する再会であった。

彼は、広島県の田舎町に帰ると同時に自転車の販売修理の店を奥さんと二人で始めたそうである。全くの零からの再出発である。使い捨て時代を逆手にとって、修理を中心としたアフターサービスを営業の基本として、コソコソと売り歩いたそうです。自転車ブームがM氏に味方したのでしょうか。一時は面白い程売れたそうである。現在では自転車だけでなく、バイク、オートバイも取扱いい、一カ月二千万円近い売上実績をあげ、従業員も三名程いる立派なお店になったそうである。そして、彼は私に淡々と、「会社財産も私財もすべてを投げ出して、債権

者のために配分したことにより、心の荷が軽くなり、故郷の町での生活は実に晴れぱれとした楽しい日々であった。小さな自己欲から解放されて、債権者の皆さんのことを第一に考えたことはほんとうに正しかったと喜んでゐる。これひとえに仏の無量の光に導かれたお陰だと、仏恩の有難さを唯々感謝する毎日であった」と述懐されるのである。私も思わず胸が熱く一ぱいになる感動を覚えた。

信仰と生活が一枚岩になることが大切である。お念仏が生活のすべての基盤であり中心となり、生活、即念仏という信仰生活でなければならぬ。そして、お念仏が生活と一枚になつてゐるかどうかは人間がぎりぎり一ぱいの所でどのように決心し、行動するかを表わされてくるものだと、私はかねがね思つてゐることである。M氏の決心と行動は誠に立派であつた。彼のお念仏はほんもののお念仏であり、彼の信仰は彼の全生活と一枚となつていたのである。

(二月二十三日記)

Ⅱ好評Ⅱ

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

— 仏教的視点より現代人への提言 —

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。
すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二二〇頁 価一五〇〇円

(千二五〇円)

(申し込み先)

千 381-12
長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二

長谷川徳太郎翁と

早川廣志さんの逝去を悼む

『浄土』誌の愛読者の方々に悲しい報告をいたします。実は永い間本誌の印刷出版を従事していただいたお二人の生粋の印刷人を、昨年末から今年にかけてたて続けに極楽浄土へと送ってしまったことです。

旧臘十二月二十二日に、長谷川印刷株式会社社長、長



—在りし日の
長谷川徳太郎翁—

谷川徳太郎翁の突然の訃報に涙した矢先、この一月二十日には、表紙関係の印刷をお願いしている早川印刷所の早川廣志社長の急逝に接してしまったのです。長谷川翁は、二十五年にも及んで『浄土』誌の印刷を担当され、これを縁に念仏信仰にも精進された日頃の生活でしたが、八十二歳というご長寿とはいえ、いつもながらのお元氣から考えれば誠に突然の哀しみでありました。また早川さんは、四十九歳の若さのご他界、残念でなりません。しかし両印刷所とも、後継者に恵まれ、今後とも『浄土』誌のために頑張っていただけそうです。――



—生前の早川廣志氏
(旅路のスナップより)—



念佛ひじり三国志

(十四)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

大原野の北西隅、谷川添に登った山ぶところに寂光院はあった、壇ノ浦で入水したが、救い上げられ、都へ帰ってきた建礼門院がその晩年をすごした庵居である。

寺の裏山は墓所になっていて、素朴な自然石が点在している。「大原西陵」と呼ばれる。建礼門院もそこへ埋葬されたらしいが、墓石を指示することは出来ない。

住蓮はその昼下がり、寂光院へ登っていった。右京権太夫の三回忌にあたり、一門八講を営むということで、

息子の信実から招かれたのである。

住蓮が招かれたのは、隆信の終焉に立ち会ったからであつた。故人は篤信の念仏者で、深く法然に帰依していた。絵筆を握っては当代随一の隆信は法然の肖像画もえがいた。

一昨元久二年の二月二十七日、隆信は正念往生を遂げた。まさしく正念往生で、異父弟にあたる藤原定家は「明月記」で「臨終ノ体、殊勝。高声ニ念仏シ、清衣ヲ著ケ、五色ノ糸ヲ引キ坐シ乍ラニ終フト云々」と誌している。

この臨終に立ち会ったのが住蓮と安樂で、三人は声をそろえて来迎讃を唱えた。隆信は阿弥陀仏の御手と結んだ五色の糸を握りしめたまま安らかに絶息した。六十四歳であった。

彼の専修念仏への信仰は、息子の信実や娘の九条院に引き継がれた。九条院は難波内侍とも通称され順徳院に仕えた。その娘二条院の姫君は、藤原定家によれば空阿弥陀仏らの外護者で「念仏宗の張本タルノ故ナリ」（健保五年三月二十九日、「明月記」と言われた女性である。法然滅後における専修念仏の布教が、彼女らの住居だった九条邸を道場として実施されたらしい。

右京権太夫隆信の墓は寂光院の裏山、大原西陵にあった。これは父為隆以来のものである。

父の左京大夫為隆は歌人で「後葉集」という私撰歌集を編んでいる。為隆の兄たち、為業、頼業はいずれも歌人で、晩年は兄弟三人がそろって出家し、大原に隠遁した。入道名も上から寂念、寂然、寂超——世人は彼らを「大原の三寂」と呼んだ。よほどの奥山の里に魅かれたのであろう。

ちなみに隆信の母は加賀ノ方。夫為隆に去られたあ

と、藤原俊成に再嫁して定家たちを生んでいる。

住蓮が寂光院の御堂へあがると、すでに一門の人々が顔をそろえていた。

裏山の墓所は未だ雪深い。到底、登ってゆくことは出来ない。追善の回向はこの御堂内を営むらしい。

「平家物語」によれば、寂光院は一棟だけの朽ちかけた御堂が建っており、建礼門院徳子こそこへ阿弥陀三像を持ちこんで、起居もすぐかたわらで弁じていたようである。軒下には竹の竿が渡され、粗末な麻の着衣や紙の夜具がつるしてあった、とも描写する。

元来が無住の寺で、このいぶせきただずまいも事実であらう。ただし、建礼門院が建久二年（一一九二）二月の入寂まで此処に住したとなると、疑問が湧く。建礼門院が安徳帝を生み落したころ身辺に仕えた女房名「右京大夫」が詠んだ歌、

今や夢、昔や夢と迷はれて

いかに思へどうつつともなし

その前書きに「建礼門院大原におはしましける頃、尋

ね参りたるに夢の心地のみして侍りければ、思ひつづけ侍りける」とある。彼女が大原へ忍んでいったのは文治二年（一一八六）である。「大原におはしましける頃」だから、入寂に迫った晩年は別の場所へ移っていたのであろう。

当然、寂光院は元の無住寺へ立ち戻ったにちがいない。

ついでのことながらこの女房「右京大夫」が、ひところ隆信と肉体関係を結んでいたとは、前でふれた。

さて建永二年の隆信忌。

「安楽房さまは？」

と息子の信実が訊いてきた。彼も当代きつての画人だった。

「それが何としても連絡が取れませぬ」

「残念です。父にとつてお二人は最もだいいじなお方でした。今日も礼讃の御唱和をお願いしたいと思つておりましたのに」

このあと信実は、東山にいる法然の消息をあれこれとたずねた。近ごろ病みがちだということだが、と表情を暗くした。

「病みがちでもお上人さまは、お念仏を唱えはじめると別人のように元氣になります。お念仏の功德をお信じになっているからでしょう」

住蓮は答えながら、最近の師法然を思いうかべる。

たしかに壮氣がよみがえった、と思う。肉体が回復したというよりも日々重圧が加わってくる「法難」の兆しに、信じがたいような氣力が盛り上がってきたのだ。

「法然さまはお幾つになられたのでしょうか」

「七十四……いや、明けて五歳になったはずです」

一座が軽くざわめいた。もう七十五歳にもおなりで、という嘆声も洩れた。

一座の者、それは殆んどが隆信の子息たちだったが、亡き父から日ごろさまざまな消息を聞かされていたのであろう。みんなが法然を熟知していた。住蓮を中心に、あれこれと法然の日常に質問を集中してきた。

それをしおに信実は立つと、席を御堂の奥隅へ移した。そこには見知らぬ僧が一人、静かに瞑目したまま端座していた。

信実はその耳もとで何かささやいていたが、やがて手を引くようにして住蓮の前へ連れてきた。

＜女人念仏＞



「住蓮さま、この方をご存じでしょうか」

「いや……」

肌は陽焼けして黒いが、秀麗な眉目だ。

「高野の蓮花谷にいる生蓮房と申します」
みずから名乗った。

「蓮花谷なら明遍僧都の……」

「はい、お世話になって、あそこへ隠遁させてもらいました」

声音も澄んでいる。

「じつはこのお方は……」

と信実が説明を加えた。

平重盛の息で宗実という。維盛や資盛らの弟で仁安三年の出生だった。生まれ落ちるとすぐに左大臣経宗の猶子となり、平家一門とは離れて文官の道を歩いた。土佐守、常陸介と果進し、寿永二年（一一八三）の平家逃亡時には散位（さんに）だった。

宗実は、自分は左大臣の子であって平家一門ではない。その自覚から都に踏みとどまった。ところが木曾義仲が乱入してきて平家の残党狩りを開始すると、経宗大臣はわが身にふりかかる危険を恐れ、宗実を邸外へ追放

してしまった。そればかりか、彼の血統書まで提出したのである。

やむなく宗実は俊乗房重源にすがり、奈良東大寺の東南院へ逃げこんだ。そこから明遍たちの手引きで高野山の蓮花谷へ身をひそめた。以来、殆んど都へは帰ったことがないという。

「大相国頼実卿とは、つまり兄弟でいらっしゃいますな」

住蓮は警戒の眼を光らせた。

現在、この都で兵杖の権を握る頼実だ。本人の意志とは関係なく、自分ら念仏ひじりに断圧を加えてくる法権上の責任者であった。

「遠い昔の話です。いまの私には弥陀一身のほかに父母も兄弟もごさいません。いや、仏法の師も弟子もありませぬ」

「明遍僧都とも余りお会いにはならないのですか」

「しばらくお会いしておりませぬ」

淡々と語る生蓮房の涼やかな眼もとに、住蓮は未知ではあるが物語で聞いた「平家の公達」の名残りを思う思いであった。

一門八講の仏事はとどこおりなく終った。右京大夫隆信の遺族たちは、三々五々都の方へ引揚げてゆく。

ふりかえると大原西陵はすっぽりと白雪におおわれ、そこを渡ってくる風は肌を剝ぐような冷気をふくんでいた。

住蓮は何となく生蓮房とつれ立っていた。このひじりにもっと聞きたいことがあるのだった。

「父母も兄弟も忘れたあなたが、なぜ右京大夫の仏事なぞに現れたのですか」

「私にもわからない……ただ神護寺で一幅の絵を見て、それに魅かれて作者をたずねたくなり、左京権大夫どのを訪問したら」

「此処へつれてこられた、というわけですか」

「建礼門院がいらした寂光院なので」

「ところで神護寺の絵とは？」

「右京大夫どのの筆になるもので、父をえがいたものです」

こんなに高尾の神護寺に二枚の肖像画が残っている。

隆信がかいた頼朝像と平重盛像である。

これを東洋美術の最大傑作と評価したのは現代フランスの作家アンドレ・マルローだった。エジプトやシルクロードの壁画をも凌ぐ、と言い切っている。

隆信の画風はその子信実継承され、発展した。とりわけ「北野縁起」八巻などの絵巻物に出色の冴えを示している。彼の門流からは幾多の逸材が輩出し、とりわけ吉光は「法然上人絵伝」四十八巻をえがいたのである。当初は吉光一人の筆で成ったが（大和当麻寺所伝）、後になって勅命で多数の宮廷絵師が分業で完成した（知恩院蔵）という。

とにかく、それだけの画才である。いわんや幼き日、親しんだ父の遺影だ。平重盛は宗実が十一歳の夏まで存命している。懐久の情に酔わぬはずがない。しかも隆信の画法は、その最大の特徴を似顔絵、肖像画で發揮しているのであった。宗実が、父の画影に記憶の実像以上の親愛観を寄せたのは当然のことであろう。その作者を追慕するあまり、寂光院にまできてしまった、というのである。

話は脇道に外れるが、法然の肖像も原型は隆信ないし

信実の手になったとつたえられている。あの「法然アタマ」などは、デフォルメが加えられたとは言え、いやそれだけに法然の実像を完璧にとらえているはずである。

それを軽んじて、近代画法での怪しげな法然像のとらえ方は無知盲昧も甚だしいと言わねばならない。近時、そんな法然像が横行している。

「佐々木高綱入道をご存知か」

住蓮は、宗実から訊き出したいと思っていた話題にふれた。高綱入道は、目下彼が緊密な接触を保っている、これも高野蓮花谷のひじりであった。

「佐々木入道……」

「宇治川の先陣、あの四郎高綱です。了智と名乗って建久のころ、蓮花谷入りをしたはずですが」

「さあ。私も蓮花谷の住人は過去を語らず、未来を策せずで、そんな話は全く致さぬので、お会いしたことはあるのだから、とんと記憶が」

「数年間、蓮花谷にいて、あとは摂津、播磨、出雲あたりを遍歴しています。近ごろ京にもよく現れますよ」

「そうですか。明遍僧都でも現れると、そんな話題に花が咲くのですが、近ごろの僧都はあまり高野へ登ってま

いりません」

やや皮肉っぽい語感だ。宗実の生蓮房は明遍の俗物性をなじっているのであらうか。

近ごろ遁世ノ人トイフハ、髪ヲ切りツレバイミジ
キ学生・説教師トナリ、高野ニ登リツレバ目出タ
キ真言師。ユニシキ釈論ノ学生ナリ

と高野ひじりの俗性化を皮肉ったのは明遍門弟の敬仏房であった。門弟という系譜は組み立てているが、敬仏にはその師を皮肉るぐらいの気骨はあったようである。それと、明遍がほんもののひじりとなるのは、この少し後のことである。

「それにしても、あなたもここまで俗界へヨリを戻されてしまった」

「……」

「京へ出てきて亡き父上と再会し、殿上人たちに身分素姓も明かされた。いま少し深入りしてみる気はありませんか」

住蓮は誘った。

「深入りするとは？」

「私もこれからお訪ねしようと思うのですが、明遍僧都とお会いになっては如何です」

五歩、六歩と宗実は黙って歩き続けた。明らかに迷っている。住蓮も強いて即答を求めないことにした。

高野川添いに下ってきた若狭街道は、賀茂神社の杜が望める地点にまで達していた。高野川はじきに鴨川と合流する。

「あの寂光院には阿波内侍がいたのでしょうか？」

突然、沈黙をやぶった生蓮房は住蓮にとって未知な人の名を口にした。

「阿波内侍とはどういう人ですか」

「小督（おごう）ノ局、桜町中納言の娘にちたる人です。そうです、守護寺にはわが父の肖像とならんで中納言の御影もありましたよ。私はむかし、小督ノ局を何度か見かけたことがあります。あんな美しい女人には、その後もめぐり逢ったことがございません」

夢物語を綴るような宗実の口調であった。住蓮如き下々の育ちでは覗き得ない世界だったとも言える。

桜町中納言——邸内いっばいに桜を植えこんで、その

花を愛でることだけに生涯を傾け、変転きわまりない政局の動きに背中をそむき続けた美貌な公卿である。歌に、絵画に、風流の世界に遊んできた右京大夫隆信だったが、その「ころね」だけは桜町中納言に及ばなかったと自覚していたようである。みずから買って出た肖像画をえがいた。

桜町中納言。亡き信西入道と紀伊ノ二位との間に出来た子、成範である。平清盛の娘と婚約がととのったが、平治ノ乱で破談になった。

生蓮房の宗実が、いきなりこの桜町中納言の娘を話題にしたのも、これから会いにゆくかと持ちかけた明遍僧都は中納言の兄（異母）だったからであらう。

小督は宮中に出仕、余りの美女ぶりにかえって男縁は薄かったようである。

山吹きのにはひ、青き単衣、えび染の唐衣、白腰の裳、着たる若き人の額のかがり、姿よそひなど人よりは殊に花々しと見えしを、いまだ見じとて、人に問いしかば、小督の殿とぞ聞きし

（建春門院中納言日記）

高倉帝の生母建春門院に仕えた藤原俊成の娘みあみノ局は、こう書いている。女に惚れこけてしまふ美女だったであろう。

わずかな例外として右小將隆房が執拗に言い寄った。だが隆房には立派な正妻があつた。それも今をときめく平相国清盛の四女である。

死ぬほど恋いこがれたが、小督はすべてを許さなかった。

二十歳にもなつて(当時女人の二十歳は中年期を意味した)小督に愛人が出来た。四つ歳下の男、高倉帝その人である。

しかも高倉帝の正后こそ清盛の娘徳子、建礼門院であつた。

小督は高倉帝との間に女の子をもうけて生み落す。

右小將隆房と言ひ、高倉帝と言ひ、おのれの娘の亭主を二人まで恋の捕虜(とりこ)にさせられてしまった清盛は限りなく小督を憎む。彼女を囚らえ、無理矢理に尼とさせ仲を引き裂いたのである。

失恋だけが原因ではなかつたろうが、高倉帝は二十一

歳の若年でこの世を去る。清盛自身も一カ月をおかずに落命する。

壇ノ浦から生還した建礼門院が、隠棲の地を大原寂光院にえらんだとき、二人の老尼が身辺にかしずいて女院を守つた。一人は東大寺の大仏殿を焼いた三位中将重衡の妻大納言佐、もう一人は阿波内侍小督であつた。

尼とは言いながら、僧尼令にもとずいた正式の尼法師ではない。そんな形式は無視して、内心の奥底から仏を求めての「女人ひじり」たちだったのである。寂光院の春秋で、彼女たちが何を語り、何を考えたか。誰にもうかがい知るすべがない。

妙に熱をこめて小督の若き日を回想していた生蓮房の宗実は、酔つた眼を生蓮に向けてハッと現実を取り戻したようである。あわてて言葉をかさねた。

「ゆきますとも。ゆきましよう、明遍僧都のもとへ」

この世捨て人も、宮中にあつたころは小督ノ局とかいう女人に恋いこがれたのかな、と生蓮は思つたりした。そして生蓮には、全く関連のない女人像が浮かび上がってきた。

光堂がある街筋へやってきたとき、住蓮は本坊山門前の立木に数頭の馬がつながれているのに気づいた。不吉な予感がする。

住蓮は光堂へ直行することを避け、本坊の建物の方へ迂回した。初めてここへやってきた生蓮房は黙々とついでくる。

「ここではなかったな」

住蓮はわざと宿坊や殿司を覗きこんで歩いた。時間稼ぎである。しかし、視線は注意深く境内の東北隅にある光堂へそそがれていた。

迂回をしただけの甲斐があった。本坊大殿の裏をひとまわりしてきたとき、住蓮の眼は、今しも光堂を出てゆく数人の群れをとらえた。

四人の男たちだ。いずれも狩衣姿に大身の太刀を帯した武士である。あとの一人は僧形だった。うしろ姿に見おぼえがある。尊長僧都ではないか。

山門外につないだ駒の持ち主たちである。尊長僧都以下、検非違便の武士たちにちがいないが、彼らは明遍僧

都に何の用事でやってきたのだろうか。

尊長らが門外へ消えるのを見すまして光堂へ近ずいた。

「ああ……何か虫の知らせでもあったのかな」

狭い堂内に端座したまま明遍はいきなりそんなことを言った。

「虫の知らせとは？ いや、珍しいお人にお会いしたので、おつれしたのです。おぼえていらっしゃるか」

住蓮はわざと明遍が持ちかけようとする本題を避けた。生蓮房をひき合わせた。無色の話をしているうちに相手の胸のうちが読めるかもしれない。尊長僧都の訪問を受けた衝撃波の実体を探ぐりあてたかった。

「いや、どちらの御坊であったかのう」

宗実はみずから名乗り出た。明遍は額を手の平で叩いて、失念した非礼を詫びた。

「おお、小松内府の遺児（わすれがたみ）の常陸介どの」さすがに宮中にしばしば出入りしてきた明遍だ。宗実を最終の官職名で呼んだ。声は恐縮し、言葉の内容はなつかしげだったが、表情は硬直したままだった。

「近ごろ蓮花谷へもあまり出向けなくなった。世の中が

きびしくて、思うさま届け物が出来ぬでの中」

明遍は蓮花谷の総帥を自任できたのは、ひじりとしての徳の高さ、信心の深さによるものではない。生母憲ノ局から継承した領地からあがる領米を送りこんで、いわばスポンサーの役割を果たしてきたからである。だから敬仏房のように公然と明遍を批判するひじりもいた。

住蓮たちは堂内へ上がりこんだ。

明遍は蓮花谷の話題をとめ度なく続けている。とめ度なくなつたのは、住蓮の二人だけで語りたい秘事があるからだろう。同行してきた宗実が現在どんな政治上の立場にあるか不明とあれば、うっかりそんな話題にふれてもゆけないのである。

宗実の小督ノ局の話に切りかえた。これは綿々として住蓮もうんざりである。

でも致し方ない。彼の情念は寂光院に坐して以来、二十年余の隠遁生活をどこかへ置き忘れ、公卿だった時世へ一気に回帰してしまつたからだ。その陶醉がこの光堂へまで歩を運ばせたのである。

酔いしれた宗実の口説を、さんざん聞かされた明遍は、その酔いをさますかのように決定的な言葉を吐い

た。

「生蓮房。そなた、それほどまでに小督のことを想ってくれているのか。年老いたが、あの娘、いやさ老尼に未だ健在だぞ」

「えっ、存命でいらっしゃいますか」

「会いたいのか」

「はい」

「安居院におるわ。聖覚のもとで、写経三昧に明け暮れておるはずじゃ」

聖覚も明遍の甥にあたる。つまり小督とは従姉弟どうしになっている。

「ほんとうでしうか」

「一度、訪ねてやってくれ。過ぎ去つた日々がよみがえつたようで、きつと悦ぶであらう」

ようやく宗実の追憶ベースから解放されたようである。明遍は、おそらく先刻尊長らに饗応したであらう宋茶を淹れた。

その茶に関する講釈がひとくさりあって、宗実が喫しはじめたとき、

「住蓮どの。ちょっと此方へ来てくれ。見てもらいたい

ものが……本坊の書庫に珍しい書物が届いたのだ」

「書物が、ですか」

「うむ。東山の法然ご房にみてもらいたいと思つてな」

そう言いながら先に立つて光堂を出た。

珍しい書物の到来なぞは嘘にまつている。二人きりになる口実なのだ。

果たせるかな、住蓮を本坊裏手の池ぎわへ誘うと、明遍は真剣な表情になった。

「住蓮どの。安楽房が搦らめ捕らえられたぞ」

「いつですか、それは」

「今朝方だ。太秦の広隆寺にいるところを」

「先刻きた尊長僧都が申していましたか」

「うむ……知っていたのか」

「いや、僧都が出てゆくのを見かけましたので。それで搦らめ捕った理由は？」

「知らん。いや、何でも安楽房が、広隆寺へやんごとなき女性を押しこめまいらせて、不埒な振舞に及んでいたとか。その現場へ踏みこんで……」

住遍はまじと明遍を見つめていたが、ゆっくりと、もの静かな口調で問いかけた。

「それで、尊長僧都はなぜあなたのところへそんな話を持ちこんだのでしょうか」

明遍はぐつと言葉に詰まった様子だった。この重大な知らせに、住蓮が狼狽するとのみ予想していたからである。それが、むしろ玲利な刃物でわが胸を斬りつけてくる。

「うむ……じつはな、そのやんごとなき女性を、わがいささか存じあげておる。安楽房と以前から出来ていた仲なのか、それともたぶら化したものが、確認を取りにまいったのだ」

仁和寺宮の母公、坊門局と明遍が密接なつながりを持っているとは、余り聞いたことがない。住蓮は意地悪をしてやりたい気分になった。

「そのやんごとなきお方とは誰方ですか」

「名前は明かせぬ」

「なぜです？」

明遍は知らぬのではないだろうか。尊長僧都の言葉をそのままくり返しているだけではないだろうか。

(つづく)

◎ 読者の皆様へのお願ひ —

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただけてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由 (生活の一面や所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)
- 一、枚数 四百字用紙五枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 三月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年 二月二十五日 印刷
昭和五十七年 三月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷 幹

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番



法然上人ご誕生850年を慶讃して 「わたしらの勢至丸さま」をおまつり下さい。



伊勢教区の可愛いおてつぎ子供奉仕団の心のこもった藤金によって、勢至丸さまのご銅像が和順会館前に建立されました。各ご寺院の前庭に、幼稚園に、保育園に、ご誕生850年を慶讃して、ぜひ端然と合掌される《わたしらの勢至丸さま》をおまつり下さい。

ブロンズ製

比叡山延暦寺大仏師 松久朋琳先生彫像

大型 高さ 68cm 巾 90cm 奥行 48cm

小型 高さ 33cm 巾 45cm 奥行 24cm

大型像謹納先御芳名

京 都 総本山 知恩院様	東 京 大本山 増上寺様	大 阪 守 口 来称寺様
京 都 佛教大学幼稚園様	岩 手 花 巻 広隆寺様	兵 庫 尼 崎 甘露寺様
京 都 東山学園幼稚園様	三 重 鈴 鹿 悟真寺様	鳥 取 鹿 野 幸盛寺様
京 都 文教短大幼稚園様	尾 張 一 宮 勅正寺様	山 口 仙 崎 円究寺様
浄土宗 吉水会御寄進	鳥 取 賀 露 東善寺様	愛 知 豊 川 上善寺様
沖繩袋中園様	鳥 取 布 勢 極楽寺様	滋 賀 草 津 教善寺様
滋 賀 野 洲 福泉寺様	滋 賀 信 楽 法蔵寺様	岐 阜 八 幡 洞泉寺様

株式
会社

大 西 法 衣 佛 具 店

〒605 京都市東大路通知恩院バス停前

電 話 (075) 5 4 1 - 3 3 7 7 (代)

郵便振替/京都-2294

取引銀行/第一勧業銀行 四条支店

富士銀行 河原町支店